

2026 年度 一般選抜 I 期(1/27) 国語 出題意図

大問一 出題意図（問題一全体）

問題文は、政治・社会における「決める」ことの危うさと本質について論じたものである。選択とは他の可能性を閉ざすことであり、とくに政治的な決定は、国境のような「内と外の切断（線引き）」と、革命や制度変更のような「時間的な切断」をもたらす。集合的決定が不可避にもたらす理不尽さや不愉快さの構造を、論理的に精読する力が求められる。

出題意図（個別問題）

問一：文脈に応じた適切な漢字（残酷、導入、納得）を選択する語彙力を問うた。

問二：接続詞。例示（たとえば）や話題転換（ところで）を補う論理展開力を問うた。

問三：空所補充。「決める」ことが、選ばれなかった「他の選択肢を捨てること」であることを文脈から推測する力を問うた。

問四：記述問題。決定が見えなくさせる重大な点について、対象の境界線による内と外の切断と、その決定を起点とする時間的な切断・変化の二点を的確にまとめる能力を求めた。

問五：指示語の理解。「それ」が、直前にある「国境線というものの流動化」を指していることを正確に特定する力を問うた。

問六：段落構成。個人的な決定に関する一般論を提示した上で、より複雑な政治的決定

へと議論を深めていく論理の接続関係を理解する力を問うた。

問七：理由説明。政治に「不愉快さ」が伴う理由について、それが集団的決定であり、個人の意向に反しても受け容れざるを得ない強制力を持つためであることを読み取る力を問うた。

大問二 出題意図（問題二全体）

問題文は、人間における「自分（自己・自我）」の存在について、意識の観点から哲学的に考察した論考である。タコやコウモリが目的をもって行動するとしても「自分」を意識しているわけではないことと対比させ、人間の特異性が「自分が存在することと、それを意識することが切り離せない」点にあるという存在論的な議論を正確に把握する思考力を問うた。

出題意図（個別問題）

問一：文脈に応じた適切な熟語（模様、観察、質問）を選択する表記能力を問うた。

問二：段落構成。「問い」を立て、それを掘り下げた上で「具体例」へと展開していく文章の構造を把握する力を問うた。

問三：修飾関係の理解。「このかぎりでは」という限定表現が、目標物に対する位置を計算して動くという側面にのみかかっていることを識別する力を問うた。

問四：指示語の理解。「こうしたこと」が、目的をもって動いているが「自分がそうして

いる」という自覚がない無意識的な行動状態を指すことを特定する力を問うた。

問五：空所補充。自覚がないまま目的に向かう状況を示す四字熟語（無我夢中など）を文脈から判断する力を問うた。

問六：接続詞。結論を導く換言の接続詞（つまり）を適切に補う力を問うた。 問七：理由説明。「自分がいる」ことが奇妙な事実である理由を、通常の事物は存在と意識が別であるのに対し、「自分」は存在と意識が不可分であるという論旨に即して説明する読解力を問うた。

大問三 出題意図（問題三全体）

評論文読解の基礎となる対義語の知識と、慣用句の正確な運用能力を問う問題である。

出題意図（個別問題）

問一：頻出する抽象的な概念語（抽象⇔具体、公益⇔私益、拡大⇔縮小、肯定⇔否定、主観⇔客観）の対義語関係を正確に理解する知識を問うた。

問二：身体部位を用いた慣用句（口を挟む、耳を貸す、水を差す、手をこまねく、腰を据える）について、文脈に応じた正しい表現を完成させる語彙力を問うた。